

当事者のライフステージに合わせた『手話言語』にかかる取組みについて
「乳幼児期・児童期」に考慮すべきこと

河崎佳子

1. 「ことばの発達」に関する心理学的な捉え方の変化
2. 言語学の視点からみた手話理解が、手話獲得の考え方に与えた影響
3. ネイティブサイナー と 手話を第二言語とするサイナー ～それぞれの手話を尊重～
4. 手話言語にかかる取組みとしての「**乳時期～幼児期初期** 0-3歳頃」の支援
～子どもが「手話を獲得する」「手話で育つ」環境を保障する～

◎ 対 親支援

情報提供：手話の紹介 手話を使う人々の紹介

「手話を学ぶ」機会の提供：手話講座 手話学習会 家庭訪問支援

きこえない乳幼児と「手話のあるコミュニケーションを体験する」機会の提供

◎ 対 子ども支援

「手話でやりとりする」体験の保障 → 愛着形成 認知発達 人格形成

「手話を獲得する」支援＝ネイティブサイナーになる機会を保障する

「手話で成長する」機会の提供＝ネイティブサイナーとのかかわる環境を保障する

5. 手話言語にかかる取組みとしての「**幼児期中期～後期** 3-6歳頃」の支援
6. 手話言語にかかる取組みとしての「**学童期前期** 小学低～中学年」の支援

* 「一次のことば」としての手話から、「二次のことば」としての手話へ

(岡本 1985)

7. 手話言語にかかる取組みとしての「**学童期後期** 中～高学年」の支援